

# 深層国家は偉大な覚醒を阻止できない：ウィルコック・イン タビュー（抄）

Greatchain  
2019/03/03

Edge of Wonder というサイトの一編、Deep State Can't Stop the Great Awakening: David Wilcock Exclusive Interview (Part 5) の、最初のごく一部を書き取って翻訳してみた。

注釈すべきことはいくつかある。一つは、真実を指摘する者は迫害されるということで、ウィルコックはこれまで、何度も暗殺の対象になってきたが、子供のときからすでに、異常ともいえる、激しい“いじめ”を経験している。それが彼のドラッグ癖とつながっている。これは将来、このような世界の構造を暴く仕事をする者を、サタンが除こうとしていたとも解釈できる。しかし彼は、この体験は自分の将来の使命にとって、必要なものだったと解釈している。これが、並みではないこのインタビューの、壮絶ともいべきところである。

もう一つは、彼の結びの言葉、「初めて真理を悟ることができるということは、霊的なレベルで美しいことなのだ」というところ。彼が自分の使命として、取り組むと言っている存在は、耐えがたく醜く邪悪なものであるらしい。そして彼が薬物を通じて与えられた体験は、文字通り耐えがたいものであった。彼のこの言葉は、「これまで知らなかった世界の真実を初めて知ることは、それがどれほど醜悪な真実だろうと、霊的に美しい体験なのだ」と、言いかえることもできる。これは、ウィルコックのような人々に導かれて、我々が今後、目を開かれていく（Disclosure の）内容であろう。これはこの世界のすべてが、人間の覚醒のためにあるという神の働きを、直感している者だけが言うことである。芸術家のような感覚がなければ、この時代を人は生きていけないだろう。2年前に、私も同じように、悪の根源に目を開かなければ闘争はできない、という趣旨のことを書いたが、もちろん彼のような体験も知見もなかった。<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/170205.pdf>

「大覚醒」という言葉さえ知らない平均的日本人は、二重の温室に隔離された可愛いペットのようなものである。TV番組などは、より深く我々を眠らせることを意図していることがよくわかる。

---

ここでちょっと私が隠したことの無い経験を話そう。私はサイケデリックの体験をしているが、それはLSD、シビレタケなどによるもので、26年前にその種のことが私に起こって、それをやめるまで続けていた。そのサイケデリックの経験は、恐ろしい幻覚の旅(bad trips)に連れ込まれることで、人々がもしやる気になれば、どんな場合もそうなると思う。やってみよと言っているのではないが、非常に危険なもので、少なくとも私の経験ではそうだった。ある非常に強烈な悪魔的な幻覚が起こる。

なぜこれを続けていたかという、あるレベルでそれは教師になり、コーチになって、ある場所へいくにはどうしたらいいかを私に教えるのだ。私がそれを希望するか否かに関係がない。なぜなら、私に選択の自由はなく、どこへいくにしても、それは最も悪魔的な恐怖、狂気、パラノイア、滑稽なレベルの不安やパニックが起こって、普通に人が神経症的なブレークダウンとか、パニックの攻撃とかで説明するようなものではない。そしてそのようなゾーンに閉じ込められ、そこから抜け出すことができない。なぜかと言うと、サイケデリックの経験では、時間の終わり方が、ある経験が何時間も、何時間も続くよう思われ、あまりにも恐ろしいので、それがどんな風のものか、いわば自分がどこにいるのかも、説明することもできない。あまりにも恐ろしいので、どこかのループに入ることもできない。どんなに恐ろしいかと言うと、自分の身体を動かすと、体のまわりのあらゆるものが、壊れて砕け、散りぢりになるようなのだ。

しらふの意識ではまったく馬鹿々々しいものだが、パラノイドで起こるサイケデリックの幻想では、魂が恐怖を食べていると言ってもよい。その恐怖は、あらゆるものを超えているので、人は自分の全人生を、これ以外のどんな体験でもして、過ごしたいと思うほどだ。そしてそこから逃げられないのだ。それに対して、伝統的なシャーマンの儀式でも、現代的なガイドの場合でも、あなたがコーチを受ける人は、幻想の旅から逃げるのではなく、そのものの中に入っていく。あなたはそれを探検し、それと契約し、自分の感情は完全にすっきりする。あなたはそのものに完全に敗北する。恐怖に片を付け、恐ろしいものの片を付け、脅迫に片を付ける。そのようすることによって——そこから逃げるのではなく——自分の考えや感情が何であるか、その結論が何であるか、それが客観的に分析できるようになる。これは私ではない、これは現実だ、あるいは、これは現実の一部だ。しかし現実の全体ではない、だからその意味で、これもまたマリファナでも起こりうる…といった具合に。ある種なマリファナは、非常に強力なサイケデリックの経験をさせる。だからたとえ、あなたがやっても、例の幻覚の旅に連れ込まれることがある。そしてこれは今、法的に許可されている。

それで何が言いたいのか。それは、人間の意識の拡大ということがあって、今、我々は文明として、そういう境地に入ろうとしているということだ。より大きな意識の拡大というものがあるのだが、多くの人々がその境界を越える用意をしないで、悪い幻覚の旅の用意をしてい

る。——ただ、あなたは一度だけ、パラノイド患者の世界を経験してみなければならぬ。それは電話が怖くなる世界だ。パソコンが怖くなり、テレビが怖くなり、外出が怖くなり、それを友人に語るのが怖くなる。なぜなら、彼らが怖くないと、どうしてわかる？ あなたが自分の車を怖くて運転できないと言っているとか？ 両親に話せないとか、仕事にいけないとか、学校にいけないとか…？ こういうことは普通であり、より高い意識を持つと感ずる人々の間では、現実にもいつも起こっていることだ。

わかるだろうか——私は恐怖を拒否する、私は暗闇を拒否する、抑圧的情報を拒否する、と言うこと…、私は自分自身の現実を創り、これこれには創らないと言うこと…。私は平和な世界に住みたい、幸福な世界、喜びと至福と神の意識…、あなたがそれを何と呼んでもいいが、**もしあなたが、自分の宿題をやる勇気がないなら、もしあなたが影の存在に直面し、悪い幻影の旅に取り組むだけの勇気がないとしたら、それは問題なのだ。**

その場合、あなたはある意味で、暗黙の普遍的な契約を結んで、子供たちが誘拐されたり、強姦されたり、拷問して殺されたり、肉を食われて内臓を売買されたりするのを許しているのだ。あるレベルでは、我々はこういうことが起こるのを許可していることになる——もし、これが暗黒次元だとか、ネガティブな力だとか、恐ろしいとか、自分に力がないとか思うなら、私は、それがなかったことにすることはできない。この情報は、私の人生の一部として入っているので、それをやり直すことはできない。そこで途方もない話のようだが、心理的な観点から、ユング心理学の原型の立場から、そこへ潜り込んで、この醜いものを見つめてそれに直面することは、はるかに健康な仕事ではないかと考える。そしてひとたび、この悪の幻想の旅を受け入れ、それが現実のものであり、世界がこのようなものである可能性を受け入れるならば、そして、我々が嘔吐の感覚をもっているとわからせ、ベッドから起こしてもらいたくない感情をわからせ、食べた物が納まらない感覚を知らせ、誰もこの者たちに話しかけられたくない気持ちをわからせ、君たちは冷たくて気味が悪く、こちらは風邪をひいていて熱があるとわからせ、お前が動けばそれがわかるのだということを理解させるならば、この世界にはまだ良いもの、ポジティブなものはあるが、私は、あの悪の幻の旅だけは許すことができない、それが世界の一部であることは許せないと言おう。そうすれば今、公的にそれを伝えたことになるだろう。この当然のことはわかってくれるだろう。そして目覚めを経験することは美しいことなのだ。**初めて真理を悟ることができるということは、霊的なレベルで美しいことなのだ。**

——以上